

# 登校拒否児の指導過程

足利市立富田小学校 影山憲一

## 1. 本人の概要

4年女子、M子。教研式知能検査、偏差値44。家族は、父（工員）、母、兄（高校2年）、姉（中学2年）、姉（小学6年）、妹（0.5才）、妹（0.5才）。※妹2人は双子。登校拒否は3年の後半から。

## 2 登校拒否の概況

### (1) 登校拒否の原因

怠けか登校拒否か判断する以前においても、学校内においては特別に欠席の多い児童であった様子である。3年生の11月に風邪のため欠席が断続的になってきた。この時期までM子は、兄1人、姉2人を上にして、末子として育てられてきた。家庭の経済状況は裕福ではないが、両親は甘やかして育ててきたので、M子は自分の思いのままに過ごしてきた。そしてこの時期に、双子の妹が誕生した。両親からの独占的愛情が欠落してきたことを感じてきたこと、又、身体的にも弱いこと等が重なり合い、次第に学校生活を拒む兆候が見られるようになってきた。家庭における経済的事情が影響してか、M子が登校する際の衣服はあまり清潔でない。そのためか、学校内で他学年の男子児童から、「汚ない。」、「くさい。」等の悪口を言われたこともある。度重なる欠席は、4年生になってから一層著しくなり、学年末の3月になってからようやく学校へ復帰するようになってきたものである。

### (2) 欠席状況

(3年) 1学期、20日。2学期、29日。3学期、19日。なお3月は欠席数が13日となつており、1か月間においては、この1年間で最も多い。

(4年) 1学期、68日。2学期、105日。3学期、44日。5月26日の日光遠足の翌日から欠席が続きはじめる。その後、登校したのは、翌年(昭和53年)3月1日であった。186日ぶりの登校であった。

## 3 登校拒否にみられるM子の症状

夜は、翌日の学習道具を準備して、ランドセルに積めると母は言う。しかし、朝になると、寝床から起きようとしない。M子の姉（小学6年）は、M子の登校班の班長であり、M子宅が登校班の集合場所である。母親、姉、登校班の友だちが登校を誘っても全く応じようとしない。

家の中へ閉じこもりがちで、テレビを観ることと、2人の乳児をあやしていることが多い。病弱な身体な上に、屋外に出ることが少ないとめか、顔面蒼白・神経過敏の症状が強い。

## 4 登校拒否になってからの指導と経過

新規採用教員として、いきなり3年生の後半から欠席がちなM子を担任することに大きな不安を感じた。4月当初、学組組織づくりにおいて、M子を「保健係」にしたのは本人の希望もあってのことであった。「衛生検査」や「保健調べ」等では、同じ係の女兒が3年生のときからの仲よしだったこともあるが、ハンカチ・爪・ちり紙等の検査をしっかりと果たしているように感じた。休み時間においても、気の合った数人の友だちといっしょに、なわとびや、ゴム段等を楽しそうに遊んでいた。前年の担任であったベテランの女性の先生からも、担任が若い男性になったので、M子の内面的なものに変化が出てきて登校するようになってきたのを喜んでくれた。しかし4月から5月にかけて、断続的な欠席が次第に増してきた。休日（日曜・祝日）の翌日には、決ったように欠席となってしまった。

### (1) 指導上の留意点

4月当初からM宅を訪れて感じてきたことは、家庭内の問題である。経済的には、そほどゆとりがあるようには思えないが、母親はかなり浪費型のようである。両親の生活態度も規律を感じられない。M子やM子の姉も、時たま新調した衣服を着てくるが、それ以後は汚れてもあまり洗濯などされていない。家庭における生活習慣が大きくM子の登校拒否に影響していると思えた。

また、M子の性格が、内向的であるため自分から仲間の中へ溶け込んでいくことが苦手であることも学校生活の楽しさを味わうことを阻害しているようなので、学校内でM子と気の合っている女兒ら数人で、「仲よしグループ」を組ませるようにした。このメンバーには、M子宅裏に4年生になってから転居してきたH子もいるので、H子にはなるべく家庭に帰っても近所同士の友だちとして仲よく遊び合うように頼んでおいた。

#### ア 家庭に対して

母親よりも父親のほうがなお、学校のことについて関心が弱いので、母親を通じて家庭での規則正しい生活の習慣化をお願いする。またM子の自律心を育てるためにも、できる手伝いは積極的にさせるよう話す。姉が6年生にいるので、姉として学校での出来事などをM子に話してやったりして、登校する意志を持たせるようにと話す。

#### イ 「仲よしグループ」に対して

どんなことでもよいから困った問題は先生に相談する。自分で言いにくいことは、グループの人に頼んでもよいから先生に話す。もし言いにくい場合などは、グループ日記に書いておくこと。

#### ウ 養護教諭に対して

身体が弱いので、よく保健室に行くことが多いが、女子が2~3人で行ったときなど担任には言えないことなどがあるので、児童の本当の実態をは握るために、あらかじめ注意して見守ってほしいとお願いしておく。

## (2) 指導と経過

本人・家庭への働きかけ	本人・家庭の様子
<ul style="list-style-type: none"> <li>前年からの欠席癖が表わされたようで、ここ数日欠席が目立つ。前年度担任の先生とM子宅を訪問する。M子と母親を交じえて、4年生に進級したことの意義や心構えを話し翌日からの登校を約束する。</li> <li>出勤途上、M子宅を訪問する。M子宅へ集合している登校班児童M子と共に、学校までの200mを歩く。</li> </ul> <p>※ 学校内における生活では、欠席が多い割には、他の児童との違和感がない。 授業中に根気に欠ける面が多く、よそ見やあくびが非常に目立つ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>母親もM子に対して真剣に登校させるよう説得する。M子はほとんど会話の中に交じわらず、妹をあやしている。 家の中は、極めて未整理の状態であって、母親も2人の乳児をかかえて、家事が思うようにいかない様子である。</li> <li>いやがることもなく、スムーズに家を出た。</li> </ul> <p>※ 学校内の仕事を頼むと、快く引き受けてくれる。</p>
<p>4.17</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>前年度担任が少女用の衣服類（前年度担任の娘さんが着用したもの）をプレゼントに行く。欠席せず毎日登校するように話す。</li> <li>始業前、3年生のとき仲良しであった2人を連れてM子宅を訪問する。最初は2人の女児がM子を呼ぶ。しかしM子は全く顔を出さない。</li> <li>出勤前、M子宅を訪問し登校を誘うが、全く反応がない。無理をしないでよいことを母親に告げる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>M子は、ことのほか衣服類に関心を示し、このプレゼントを喜んでいたとのこと。</li> <li>女児2人が呼びに来たことに対して、父親は、今後迎えに来てほしくないとの意を告げる。</li> <li>ふとんの中にもぐったままで全く登校する意志がないようである。</li> </ul>
<p>5. 2</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(家庭訪問)</li> </ul> <p>公式な家庭訪問であるが、登校さ</p>	

せるには、家族全員の協力が必要であること、また登校しない時でも乱暴な行為は慎むよう話し合う。

- 家庭では父親も母親も、かなり登校させるために説得しているようである。

#### 5.2.4 ※ ソシオメトリックス・テスト

本人は欠席、日光遠足を前にして実施する。M子に対しては、女子1名が選択を示し、男子3名が排斥を示している。

- 5.2.5 ○ 始業前、M子宅から電話を受ける。明日の日光遠足にM子が行きたがっているとの母親の話しだった。是非とも参加するように、待っているとの返事をする。

バスの座席は、前日のソシオメトリックス・テストをもとに、M子は仲よしグループの一員の隣に配慮する。

- 遠足事前指導では、M子もうれしそうな顔でダループごとの話し合いにとけ込んでいた。バスの座席についても喜んでいる様子であった。グループごとの歌の練習においても、積極的に取り組んでいた。

#### 5.2.6 ○(日光遠足)

遠足の全行程において、全く疲れも見せず、終始、友だちと楽しそうにしていた。帰りの車中において、「明日から楽しく学校で過ごそうね。」との約束をする。

- 車中では、友だちといっしょに歌をうたったりして楽しそうであった。

- 5.3.0 ○ 遠足以来、欠席の日が続く。「仲よしグループ」のH子がときどき遊びに行く。M子の姉(6年生)に対して、6年担任から、姉の立場から登校を勧めるよう指導した。

○ 日光遠足の記念写真やその他の印刷物等を持ってM子宅を訪問する。最近の学校生活の様子や、学級の友だちが心配していることなどを話す。

- この頃からMは、日中ほとんど屋外へ出なくなる。そして夕方になると、近所の店へ自転車に乗って出かけたりすることが多くなってきた。

- M子は寝巻の姿で過ごしていた。担任が訪れると、妹の寝ているふとんの中にもぐり込んでしまう。M子は、担任に全く顔を向けようとしない。終始、母親がふとんの中のM子に対して、ゆすったり

- 校長がM子を訪問し、母親と登校について話し合う。
- 6.2 9 ◦ 学年主任と2人してM子宅を訪問する。最近の家庭での生活ぶりや、健康状態等について話し合う。家族全員の協力が必要であることを確認しあう。
- ※ 教育委員会より就学の督促についての通知を受ける。
- 6.3 0 ◦ 午前中、学年主任と2人して母親の了解を得て強行策に踏み切る。一度、学校へ来てしまえばと考えて実行したものであるが、M子の抵抗を見て母親が中断の要望を強くしたのでやめる。
- ※ 午後、市民会館に出張の後、教育委員会、県南福祉事務所らの先生方からアドバイスを受ける。M子の心を開かせるには、外側から一方的に働きかけるだけでなく、自己の中で、心の扉を開かせることが大切である。そして小さなステップを踏んで一步一歩、登校拒否の症状を乗り越えなければならないとのことであった。
7. 8 ◦ 県南福祉事務所の先生がM子宅を訪問し、その帰路、学校へ立ち寄る。校長・教頭・前年度担任・学年主任らと共に今後のM子に対する指導について話し合う。家庭との連絡だけは絶やさないようにすることが、最低条件であることを確認しあう。
- (夏休み中)
- 近所の6年生女児ら数人とプールへ来て楽しそうに泳いでいる。4～5mしか泳
- している。母親も強烈な態度は取らず、軽い口調でMを説得しているものであった。
- 母親は、登校させなければならないことを言うだけとなってきている。
- 母親の態度には、担任が訪問することに対して拒絶するようなものが感じられてきている。家庭内においても、積極的な登校のための働きが弱まってきているようである。
- 双子の妹が1人、養子として家を出る。M子はもう1人の妹を1日中抱いたり、あやしたりしている日が多くなる。
- 最初のうちは、母親もなんとかこの子が学校へ行くようになってくれればと見守っていたものであるが、次第に泣きさけんで抵抗するM子の姿に、他の学校へ転校させるから、もうよしてほしいと訴える。母親もM子に対する手だてに途方にくれている状態になってきている。

げないようであるが、プールの中でボール投げをしたり、追いかけっこをしたりはしゃいでいる。担任のほうを見ては、にっこりと笑いまた逃げるようにして行ってしまう。何回となくくり返しているうちに、「プールへどんどん来て、もっとじょうずに泳げるようにしようよ。」との言葉をかける。うれしそうにしてプールで過ごしていった。

#### 8.1.4 (町内盆踊り大会)

町内盆踊り大会が学校の校庭で催される。M子も近所の友だちといっしょにゆかたを着て踊っている。放送係をしている担任のそばに寄ってくる。「ゆかたがとてもよく似合うよ。」と声をかけてやると、照れくさそうに笑い、踊りの輪の中へ入っていった。

#### [考察]

夏休み中におけるM子の行動を見ていると、学級集団へ対して心理的に障害があるために登校できないでいる。この心理的障害が縮小されていけば登校への道は近いと感じているものである。しかし、担任がM子宅を訪問したとなると、全く態度が変わってしまう。これまでの担任の取ってきた指導・行動が空転していたような感じがしてきた。

- |      |   |  |
|------|---|--|
| 9. 1 | ○ 県南福祉事務所よりM子の出席状況についての問い合わせがある。学年主任が、M子の親友T（夏休み中、プールや盆踊り等いつもいっしょに過ごしていた女児）を連れ、M子宅を訪問し、登校を誘う。 | ○ 親友のTとは、夏休み中及び普段の日の学校から帰ったあとなど、離れることなく遊んでいたものであるが、やはりこれまでと同じようにして、登校させるための誘いを感じると、奥の部屋へ入ってしまい出ようとせず、顔も見せようとしない。 |
| 9. 3 | ○ 一校時終了後、M子宅を訪問をする。2学期も始まり、新たな気持ちで取り組もうと励ます。  | ○ ふとんの中へもぐり込んでしまうといういつもの逃避である。母親もなんとなく真剣味が弱まっている感じがする。   |

※ 午後、先輩の先生と共に教育研究所を訪問し、これまでのM子に対する指導過程や方法について説明した後、今後の指導のあり方について助言をいただく。登校拒否の原因をもう一度深く追究するとともに、一度で学校の教室まで入らせることより、ランドセルを背負う、玄関を出る、通りの角まで出る、学校の門まで……のように一日の目標を持って、小さなステップを踏んで臨むことが大切であるとのこと。そして、担任ばかりでなく、養護教諭等の協力を得て、学校に対する恐怖心・警戒心を解きほぐすような方法も効果があるとのことを聞かされる。これまでの方法に改善すべき点を見い出すものであった。

- 9.2.2 ○ 学級児童全員に「M子さんへ」との手紙を書かせる。男子も女子もM子のことを心配している様子が強い。運動会を目前に練習に取り組んでいることや、M子がいないためダンスのダループが作れない等の内容が見られる。学級内の雰囲気はM子に対して偏見のないことが確認できる。手紙を小冊子にして夕刻M子宅へ届ける
- M子は、下着姿で妹を相手に遊んでいたものの、担任の姿を見て隣室へ逃げていってしまう。母親に小冊子にした手紙を渡す。母親の応対も最近では、担任を見るとけげんそうな様子で、会話の内容からしても、ただ担任に相づちを打つだけの紋切り型になってきている。ただ最近M子はノートに詩などを書いたりしているとのことであった。
- 10.1.0 (地区体育祭)
- M子と親友のTと2人して、地区体育祭を見に来ている。担任を見ればにこにこしている。遊んでいるところを後ろから抱きかかえて、「近いうちに遠足もあるし、楽しい演劇教室もあるから、学校へおいで。」と言う。M子は笑っているだけであるが、なんとなく照れくさそうな様子であった。このような一面を持っていながら、家にもどると全く手がつけられなくなる。
- 10.1.9 ○ 数日、昼休みを利用して、数人の学級児童が担任と共にM子宅を訪れる。級友が及ぼす効果を期待するものである。担任は門のところで待っているだけで、わざと訪問しない。
- 友だちが来ても全く出てこない。母親も迷惑そうな感じを与える。
- 1.2.2 ○ 午後、突然訪問すると、玄関先でパッタリM子と対面する。壁面には芸能人のポスターがびっしりと張られている。歌手や歌の話題を出すと、自分のほうから説明はじめた。
- 数多くのポスターの中でも、M子は「ズートルピー」のファンであることがわかる。ことその話しになると得意そうに積極的に話してくれた。これまでにない態度であることが印象に残る。
- 1.1.4 ○ 「第3学期こそ笑顔で学校で会いましょう。」との年賀状を差し出したにもかかわらず、3学期開始以来、7日を経過しているのに姿を見せない。
- 1.1.8 ○ 児童相談所の方、児童委員さんの訪問を受けて、校長、教頭らと共に今後の指導方針について検討する。この場で父親の来校を願って、家庭における保護につ

いて話し合う。訪問指導より、一定期間（1～2週間）施設の中で指導する方法を取ることにし、父親も子供の将来のためと思い同意する。

1. 3 1 ○ 福祉事務所の方がM子宅を訪問し、出発を試みたものの、M子はふとんの中へもぐり何とも出発することができないとの連絡
2. 2 ○ 再度、出発を試みたものの抵抗意識が強いため断念。
3. 1 ○ 校長・教頭M子宅を訪問、十分なる説得の上、2校時の授業中、校長室へ登校させる。
3. 2 ○ 校長・教頭が迎えに行き2校時に職員室に登校。3校時、体育で「マット運動」であったが、急きょ、「ドッヂボール」に変更してゲームに参加させる。
3. 3 ※ 2校時より登校する。休み時間などは、ふと集団から離れる行動が見られたが女子が端に取り囲んでいるので、学校の雰囲気に溶け込んでいくのが早い。授業中はやはりこれまでの生活習慣からして、集中力・持続力が弱く、よそ見やあくびが目立つものだが最後までがんばっている。  
※ 3月中は2日間、風邪で欠席したものの、あとは修了式までずっと出席する。

○ 何の抵抗もなく校長・教頭らと手をつなぎながら登校してきたとのこと。登校後は、教頭・事務員さんらと、事務用品の整理等の手伝いをいっしょにやって過ごす。校長室で給食を食べて下校する。

○ 職員室では、多くの先生方から声をかけられて多少、困惑気味であったがドッヂボールが始まると真剣になってゲームに取り組んでいた。ドッヂボールが終わるとそのまま教室に入り、給食を食べ最後の5校時まで授業を受けて、放課後、近所のH子らと校庭でなわとびをして遊んだ後、H子といっしょに帰る。

#### 4. 考 察

登校拒否の場合、その早期発見が大切なことは言うまでもない。そして登校拒否となる原因を追究し除去、あるいはその原因・障害となっているものを乗り越えるべき精神力を備えなければならぬものである。しかし原因が複数にまたがっている場合が多い。それが登校拒否行動として表面化てくるものと考える。今回のM子の場合も、原因は単一のものではない。登校拒否の続いている時、登校する条件などいろいろ出してきた。その中でも養子に行った妹をもどしてほしいとか難しい条件を出している。結局、自己の中で精神面の弱さも関連してくるものと考える。

M子は5月の末から欠席し、翌年の2月いっぱい続いたものであるが、登校してからほんの短

期間で教室へ入り、正規の学校生活に溶け込んでいる。M子が学級児童の前に現れたのは寒風すさぶ2月の校庭であった。驚きと喜びの拍手で迎える児童たちといっしょに早速、ドッヂボールを始める。学級児童とM子が懐古する時間がないようにボールを3個使った。どこからくるかわからないボール。必死になって逃げ、投げる子どもたち、へとへとになって教室へもどっていったものであった。

現在、5年生を終えようとしているM子は、欠席数は病欠のみであり、4年生の頃とは比較にならないものである。学校生活にも意欲を持って取り組んでいる。

なお、登校拒否児を扱って、今思うことは、担任のみでは、パターンが单一化してしまいマンネリに陥り易いようである。幸い本校には、問題児童に対する職員のチームワークが固いので、指導に弾力性が見られたと思う。職員間で常に指導のあり方、対応のしかたについて話し合っていったことが大変参考になったと感じる。しかし、本質的に重要なことは、一人一人の児童がどんな障害に出会っても、それを乗り越えるだけの強い精神を学校教育を通じて、児童に植え付け、伸長させることであると考える。

### 評

登校拒否の原因や症状は十人十色であるため、その対処の仕方も、その子供や家庭の状況等に応じて進めないと失敗します。それだけ対処の仕方が難しいわけです。教職経験2年に満たない担任の先生が、登校拒否の子供に対して、1年間、本腰を入れて、悪戦苦闘の末、見事解決されたことは敬服に値すると思います。この症例を通して、先生自身がいろいろと学びとり、大きく成長されたものと思われます。

不登校については、怠学か登校拒否かの見極めが大切になります。また、登校刺激を促すべきか、中止すべきかも重要な問題です。さらに、登校刺激を促す場合、その時期を誤ると失敗します。初めに方法があるのではなく、「初めに子供ありき」という考え方方が大切なわけです。本症例も時期が適切であったように思われます。学級における人間関係の改善、教職員のチーム・ワーク、関係機関との連携等の総合力の勝利かと思われます。しかし、登校拒否は、根が深いところにあるので、登校するようになったから、問題がすべて解決したとは限らない場合が多いようです。本人のかかえている悩みやつまずきがあったら、その問題への援助も進めていかないと再発することもありますので、事後指導によって、社会的自己実現が図れるような配慮をお願いするとともに、先生の益々の御活躍を期待いたします。